

尾張三河国境地帯の 古代窯業関連集落

● 永井邦仁

古代の令制尾張国と三河国は境川を国境としていたが、その両岸丘陵地帯では8世紀後半から10世紀前半にかけて須恵器・灰釉陶器窯が多数操業する。そして同地域にある豊明市・薬師ヶ根遺跡は、背後にある丘陵の窯に関わる経営拠点の一つと評価される。本稿では、境川流域南部における窯業遺跡の動態にこれら拠点の形成が深く関わっていることを指摘した。

1. はじめに

猿投山西南麓古窯跡群（猿投窯）は、古墳時代の初期須恵器の段階から平安時代の灰釉陶器生産を経て、中世には山茶碗生産が展開する、列島内でもまれにみる息の長い窯業地帯である。その範囲は尾張東部丘陵を中心とし一部は令制国の境を越えて三河国域にも及んでいる。その国境線は境川にあったとされ、同川流域北部の黒笹地区（K）と南部の鳴海地区鳴海支群（NN）、同有松支群（NA）、井ヶ谷地区（IG）の各地区はまさに国境地帯の窯跡群でもある。

以上の地区では、C-2号窯期（8世紀前葉）から須恵器窯分布が拡大し、その全てではないものの9世紀以降の灰釉陶器・緑釉陶器生産の中心的存在として平安時代前期の窯業が展開する（城ヶ谷 1998）。灰釉陶器窯は猿投窯編年のO-53号窯期（10世紀前半）を最後に縮小傾向に転じるが、次に窯が増加するのは尾張型山茶碗第5型式（12世紀後葉～13世紀初頭）であることから（藤澤 2007）、10世紀後半～12世紀前半に当該地域における窯業の転換があったとみることができる。当該期は、日本史上の摂関政治期から院政期に相当し、政治史的な古代から中世への転換期に重なることも重要である。

このように窯業遺跡（群）の動向だけを取り上げていくつかの重要な指摘が可能である。そのため猿投窯を含む各地の窯業遺跡群は、王権や律令制などの政治体制や地域支配と関連づ

けて評価されることが多く、例えば7世紀代の北陸地域で指摘された一郡一窯体制（宇野 1993）に対して、猿投窯のような窯が集中する一国一窯的な構造に注目した議論もなされている（城ヶ谷 2012 など）。

また近年では、出土文字資料研究も進んだことから、刻書のある須恵器・灰釉陶器も分析視角の一つとして占める割合を増しつつある。しかしながらその分析から導かれる評価はさまざまであり、例えば律令制開始期の猿投窯に関する場面では、官が体制構築などで生産に大きく関与しているとみるか（城ヶ谷 2012）、生産そのものには深く関わっていないとみるかで（古尾谷 2012）、大きく結論が異なってくる。それだけ窯業遺跡の抱える歴史性は大きく、生産から流通あるいは廃棄までさまざまな要素が絡み合っている分、一筋縄ではいかないことを示している。

したがって、これまでの議論をより深化させるためには、窯や刻書資料以外にもより具体的な考古資料を求めて、それらの有機的関連に基づいたモデルや仮説の提示をしていく必要がある。つまり官の関与を議論するためには、より多くの階梯を踏んでいくべきだとするのが筆者の立場である。そこで本稿では、その試みの一つとして、境川流域に所在する窯業関連の集落遺跡の調査成果をベースに、一帯の窯跡の動態に加えて古代官道の設置などの環境変化についても配慮しながら、まずは窯出しされた製品が流通に至る前段階の状況に着目してみたいと考える。

2. 豊明市・薬師ヶ根遺跡

薬師ヶ根遺跡は、豊明市杵掛町に所在する古代～中世の集落遺跡である。試掘調査段階では窯跡の可能性も指摘されていて、当該遺跡範囲内に森前1号窯遺跡という須恵器窯跡が想定されていたが、その後の本調査で窯体や明らかな灰層（窯に伴う廃棄層）は検出されていない。また古代に限定すれば、竪穴建物や掘立柱建物が検出されず、斜面を下った地点で9世紀代の井戸1基が検出されたのみで、一般的な集落遺跡とみなしがたい状況である。

遺跡の立地は、境川の氾濫原に面した丘陵端部にあり、北側背後の丘陵には大小の支谷に沿って須恵器・灰釉陶器窯が分布している（図1）。ただしその分布の中心は谷奥部にあり、当該遺跡からは最短でも約2.0km離れている。

筆者は平成18・19年度の本調査から平成26年度末刊行の報告書（愛知県埋蔵文化財センター2015）までを担当したが、総計1,400㎡の発掘調査面積に対して271入りコンテナ換算で98箱という遺物量とともに、土器・陶磁器の総重量約484kgに対し須恵器が約321kg（66%）という重量比は、その偏りが注視された。また出土須恵器の中には、焼成時に釉着したもの（釉着資料）や若干ながら棒ツクや三又トチンなどの窯道具が含まれるのも特徴である（図1）。これらは本来、窯出し時点で用途を終えるか廃棄の対象であり、専ら窯跡の灰層から出土するものである。しかしながら当該遺跡は窯に隣接するような立地ではない*。したがって薬師ヶ根遺跡におけるこれらの遺物は、製品に紛れて搬入・廃棄されたものと考えられる。

それでは具体的にどの窯跡との関連が考えられるのだろうか。薬師ヶ根遺跡の立地する丘陵先端部の両脇は、それぞれ井堰川と若王子川がつくる谷地形となっている。この両谷では須恵器・灰釉陶器窯が確認されており、NN-32号窯期～K-90号窯期に操業していたと考えられている（豊明市史編集委員会2001）。窯で焼成された製品が川筋に沿って運ばれたとすれ

ば、これらの窯から薬師ヶ根遺跡へ搬入された可能性が高い（愛知県埋蔵文化財センター2015）。

さて薬師ヶ根遺跡では、須恵器の釉着資料（図2の278・394・414）と窯道具（同299）があり、灰釉陶器の窯道具（同187）も出土している。灰釉陶器に関しては、須恵器甕の口縁部片に粘土塊を付加して焼台に転用した興味深い例（同458）もある。この甕片は二次焼成を受け器面が荒れており、付加した粘土塊が灰釉陶器と同じ発色に焼かれている。

また、緑釉陶器碗の素地（同320）もある。緑釉陶器は、栈敷1号窯で稜碗や輪花皿の素地が出土していることから、同窯での焼成が確認できる。緑釉陶器の素地はそれ自体官衙などの消費地で出土することもあるので、薬師ヶ根遺跡出土例は、その場で利用されたものだったのかもしれない。

以上から、当該遺跡は須恵器窯・灰釉陶器・緑釉（鉛釉）陶器窯ともに有機的関連が確認できる。ただし極端な釉着資料が少ないことと、先述のような窯との位置関係、さらに丘陵端部という立地から、最終段階に近い選別と消費地への流通を担った場所と考えられる。

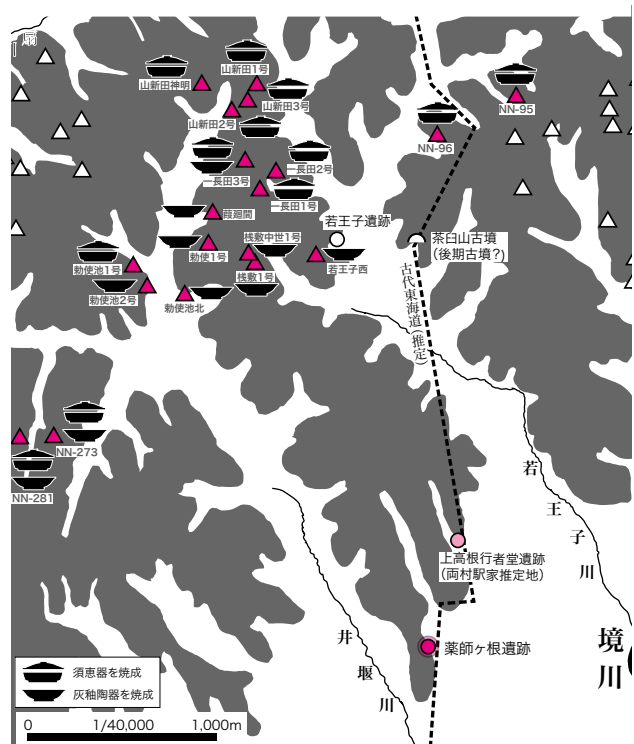


図1 薬師ヶ根遺跡関連窯分布（愛知埋文セ2015改）

* ただし遺跡南側には山茶碗窯（下高根1～3号窯遺跡）があり、12～13世紀段階は近隣に窯があったことになる。

次に、薬師ヶ根遺跡出土の特殊な遺物に注目すると、出土文字資料（図2の91・179・180）円面硯（同図の621・362）、陶馬（同図の439）、丸瓦・平瓦（同図の273・728）といった、官衙で出土する傾向の強い遺物が列挙される点にも注目できる。ちなみに時期が異なるが（12世紀）、青磁・白磁も34点ある。

このうち円面硯や陶馬は流通過程にあった可能性がある一方、墨書土器は通常出土地点で書かれたものであるから、その場の性格を示す。特に興味深いものでは、それぞれ別の灰釉陶器（K-14号窯期）に墨書（179）とほぼ同一筆致の焼成前刻書（180）のある事例が挙げられ

う。これらは判読不能な書体で個人のサインとみられ、片方のみを他人が真似て書くのは困難と思われることから、ともに特定個人の手になるものと考えられる。この個人とは、薬師ヶ根遺跡に所在して179に墨書しながら180の成形にも関与できた立場にある。このことから灰釉陶器成形の場が付近にあったと考えられる。仮に成形の場が離れていたとしてもそのことの往来が密でないこのような事象は発生しにくい。この個人については類推するしかないが、土器工人を監督するような立場であれば、円面硯や緑釉陶器素地を使っていた可能性もあろう。

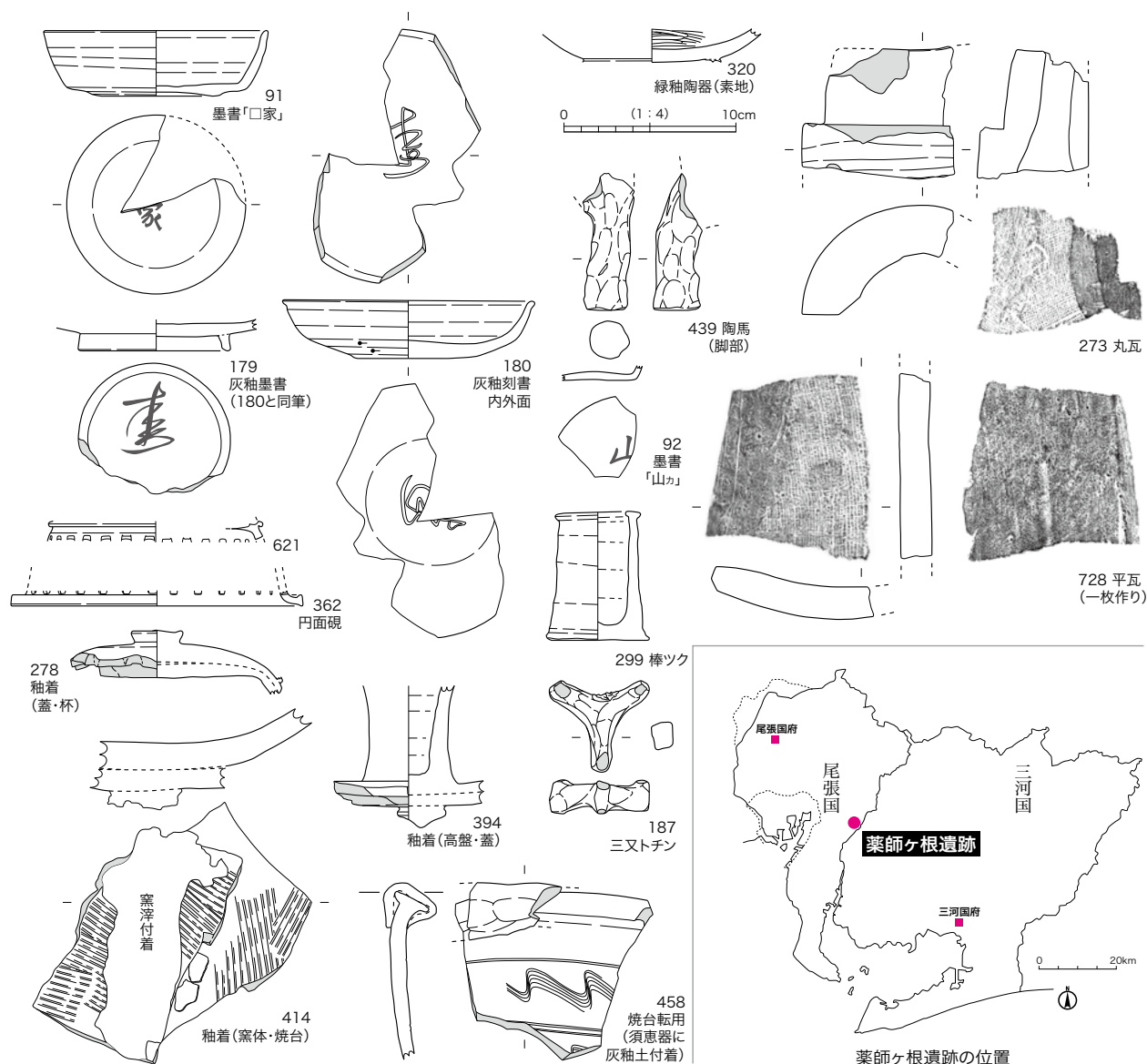


図2 豊明市・薬師ヶ根遺跡の特徴的な遺物集成（愛知県埋蔵文化財センター2015より転載）

瓦に関しては、当該遺跡北隣の尾根筋に立地する上高根行者堂遺跡において、平城宮式に系譜関係のある8世紀後半の軒瓦や丸・平瓦が採集されており、ここに東海道の尾張国両村駅家が想定されている（梶山 2000）。駅家の空間構造については、山陽道の駅家では駅館院と呼ばれる一辺約80mの中心施設の周辺に、維持管理に関わる雑舎群が想定され（高橋 2004）、さらに駅家周辺に終末期古墳や寺院などが集中する傾向もある（岸本 2004）。上高根行者堂遺跡周辺でみれば、約600m四方の範囲で古墳時代～古代の集落と考えられる遺跡が群構成になっており、薬師ヶ根遺跡もその一部ととらえられる（図5）。このような状況は、あくまで推定ではあるが8～9世紀の両村駅家とその周辺という構図に合っていると考えられる。

以上の窯業にかかる遺物と官衙的な遺物を総合すると、薬師ヶ根遺跡は、背後の丘陵に所在する須恵器および灰釉陶器窯から搬出された製品を、推定両村駅家を通過する東海道駅路やその南方で交差する境川を交通路として流通にのせる場であり、土器成形の場も含んでいた可能性も指摘されよう。

3. 日進市・金萩遺跡 - 土器成形中心の場

前項の薬師ヶ根遺跡は、窯跡そのものではないが窯業との強いつながりを示す遺物が各種みられる。本稿ではこのような遺跡を古代窯業関連集落と定義する。次に境川流域からは外れるが、同様の遺跡を天白川流域にみていこう。

金萩遺跡は日進市北新町に所在する古代の集落遺跡である。遺跡の変遷では古代以外には近世の遺構・遺物が若干みられるのみで、集落が展開する時期もI-25号窯期～K-90号窯期（8世紀中葉～9世紀後半）に限定される（図3下）。遺構は竪穴建物と土器集積遺構で占められ、特に竪穴建物SB07（O-10号窯期）からはロクロピットが検出され、土器成形の場が確認された。なお、当該遺跡はもとI-6号窯という窯跡として認識されていたものであるが、調査区上方の斜面も含めた磁気探査を実施し、反応のあった箇所について試掘調査を実施し窯や灰層がないことを確認している（愛知県埋蔵文化財セ

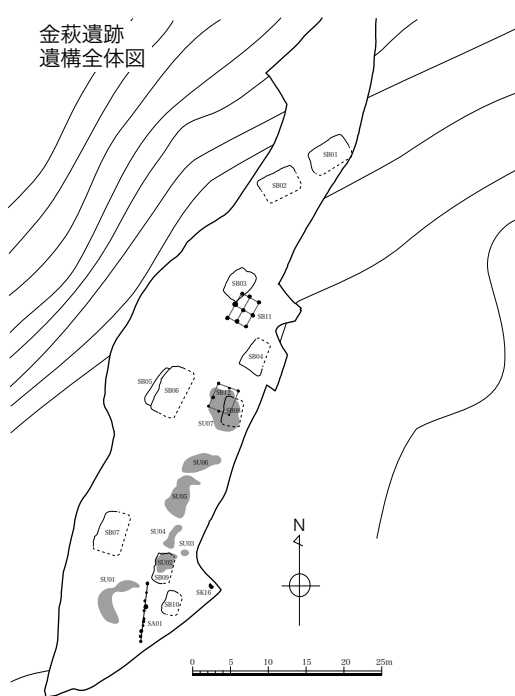
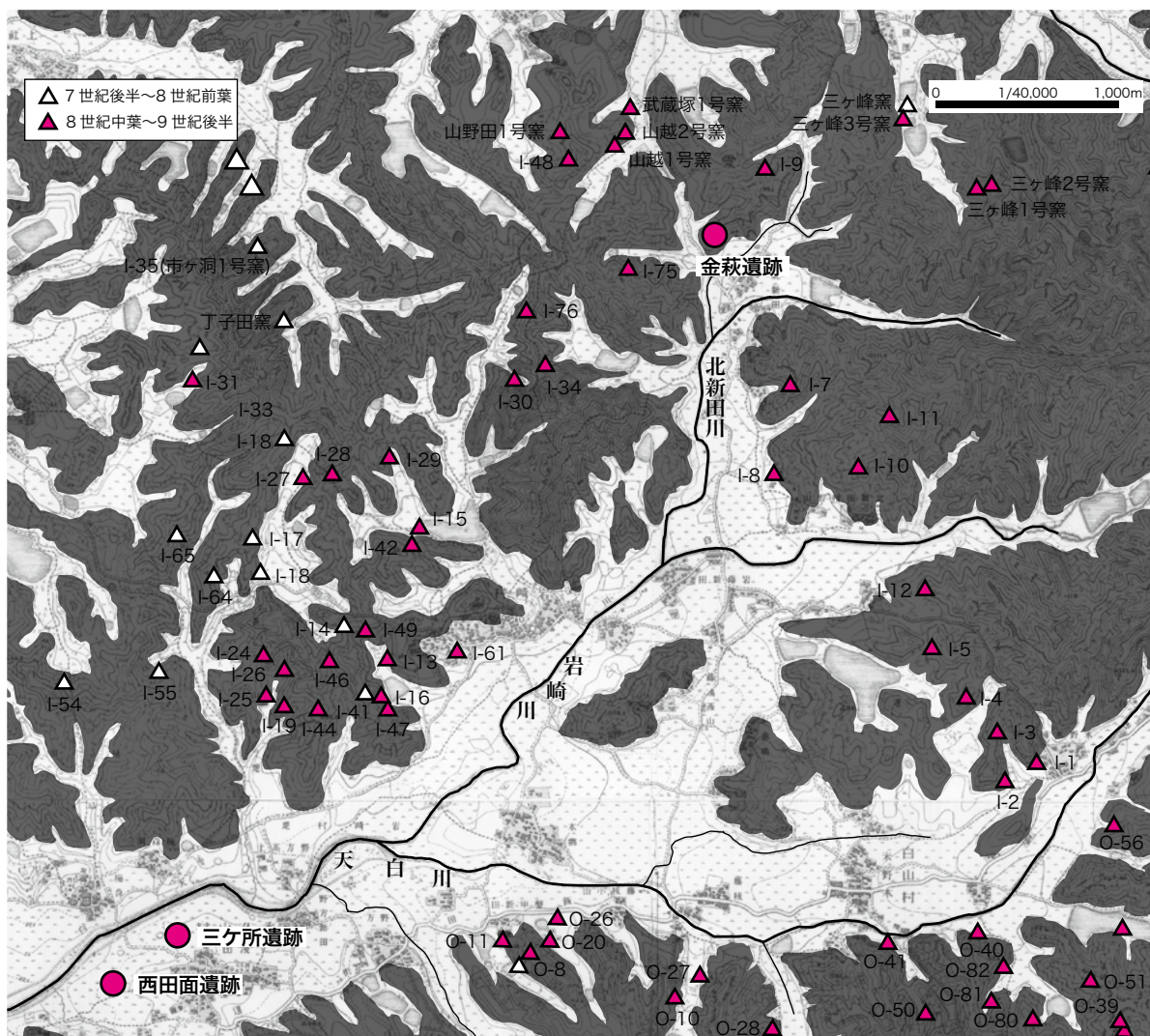
ンター 2004）。したがって、検出された土器成形の場は窯と離れた立地である可能性が高い。

土器集積遺構からは須恵器・灰釉陶器が多く出土しているが、それらには極端な釉着は少なく、一旦窯出しされた製品を搬入して選別した結果ではないかと考えられている。また「長」や「司」といった文字を含む刻書のある須恵器瓶類も出土しており（図3下1638・1640）、特定官司への納品を扱った可能性も想定される。この画期的な遺跡の調査は「土器生産者を掌握する存在」（愛知県埋蔵文化財センター 2004）と複数の窯につながる集荷場、と総括されている。このような遺跡の状況は薬師ヶ根遺跡にも通じるものがある。

しかしながら、一見時期も内容も類似する両者にも違いがある。1つ目は薬師ヶ根遺跡では明確な土器成形の場が検出されていないことである。ただしこの点については、未調査区域に存在する可能性は残されているし、灰釉陶器の刻書でもふれたように、むしろ付近に想定する必要がある。一方、2つ目は有機的関連の想定される窯の数で、これは窯跡分布（図3上）からもあきらかである。

金萩遺跡の位置は、天白川支流の岩崎川からさらに支流の北新田川を北へ遡った地点の丘陵端部にある。遺跡周辺の地形を概観すると、天白川と岩崎川の氾濫原および埋没段丘からなる幅の広い谷底平野が東西方向に延び、そこから南北両脇の丘陵に分け入る支谷群で構成されている。金萩遺跡はその中でも比較的大きな支谷の最奥部に位置している。そのため、遺跡より谷奥に位置する窯はI-9号窯やI-75号窯のみである。さらに北新田川水系に該当する谷の窯を全て足しても10基程度でしかない。当該遺跡の北側にも山越1号窯などの須恵器窯が分布しているが、これらの所在する谷はより北側から延びてきた香流川水系の末端支谷である。すなわち金萩遺跡の間には香流川と天白川の分水嶺があり、谷筋を上るだけにはいかない。全く移動不可能ではないが、焼成前の陶器を携えて峠を越えるというのは考えにくい。

したがって金萩遺跡がつながりをもっていた窯は、確認されている範囲でいえば上述の数基になると考えられる。この数は、先にみた薬師



金萩遺跡遺物
実測図

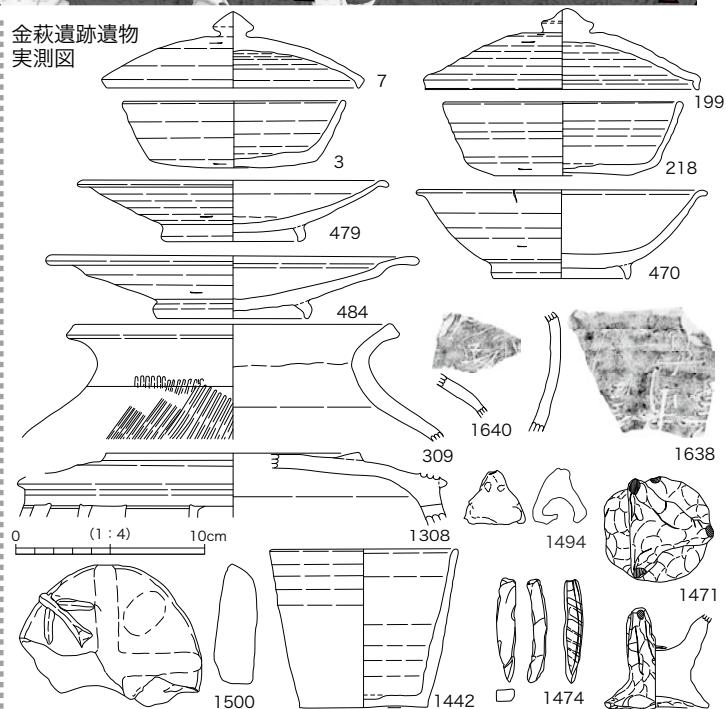


図3 金萩遺跡・三ヶ所遺跡と周辺の窯業遺跡（下半は愛知県埋文センター 2004、池本 2011 より転載）

ヶ根遺跡関連窯の数に比べてはるかに少なく、両者の位置づけの違いを示している。すなわち金萩遺跡の集落における作業の中心は陶器成形であり、製品の選別は薬師ヶ根遺跡よりも低次の段階であったと考えられるのである。

4. 日進市・三ヶ所遺跡 - より高次の集荷場

金萩遺跡周辺の窯を概観すると、当該遺跡から西方約 2.5km までは、I-17 号窯期～C-2 号窯期（7 世紀後半～8 世紀前葉）の窯が分布している。この中には I-17 号窯や同 41 号窯といった律令制開始期の窯式標識窯だけでなく、「尾治瓮五十戸」刻書甕が出土した丁子田窯（北の香流川水系の支谷に所在）も含まれている。これに対して金萩遺跡周辺から東方の谷では、I-25 号窯期～K-90 号窯期（8 世紀中葉～9 世紀後半）の窯が分布している。両分布域の境界は天白川と岩崎川の合流点付近にあって（図 3 上）、特にその北側丘陵では I-25 号窯期から K-90 号窯期までの各時期の窯があたかも標本のように密集しており、継続的な窯の操業がうかがえる。一方、ここから上流域の窯は NN-32 号窯期～K-14 号窯期が中心となる。以上の窯跡分布から、当該地点を拠点として 8 世紀後半～9 世紀前半に東方へ窯業地帯の開発が進行したと考えられる。

この合流点左岸の段丘面には、三ヶ所遺跡とその下流約 500m に西田面遺跡が所在する。両遺跡では平成 13 年～17 年に愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。顕著な建物遺構は少なかったものの、K-14 号窯期を中心とする灰釉陶器の焼成不良品や窯道具が集中して出土する溝（SD101・102）などがあり、

金萩遺跡に類似する古代窯業にかかる集荷場という評価がなされている（図 4、愛知県埋蔵文化財センター 2008）。

出土遺物の時期は、上流域の窯跡のそれに符合しており、そこから搬入されたものと考えられる。また、緑釉陶器稜碗の素地や鳥摘蓋もあり、特殊品が含まれている点で薬師ヶ根遺跡の状況に似ている。尤も特殊品については、当該遺跡で使用された可能性も考慮しておきたいが、考古資料において流過程の製品と備品を区別するのはひじょうに難しい。しかしたとえ前者であったとしても、より多くの窯からの製品を扱っていることによって特殊品の搬入される契機も増加するのであって、当該遺跡が天白川・岩崎川流域の広範な窯跡と関係していたことを示しているといえよう。このような状況は金萩遺跡とは対照的である。

5. 東海道境川渡河点と古代窯業関連集落

以上、天白川流域における 2 つの古代窯業関連集落を比較して、関係する窯の数や位置関係の違いによってそれぞれ異なる段階の製品選別が実施されていたことが推測できた。これを受けて再び境川中・下流域に視点を戻してみる。猿投窯黒笹地区のある丘陵地帯を同上流域とすると、中・下流域はみよし市市街地を北端とする南北に長い平野に相当する（図 5）。当該地域の地形・地質についてはこれまで詳細な研究がなかったため、特に河岸段丘に関する一定の見解がない。近年では豊明市域において森勇一による想定（森勇一・宇佐美徹 2003）があり本稿もそれを参照するが、みよし市・刈谷市域の段丘については、微高地から筆者が推測

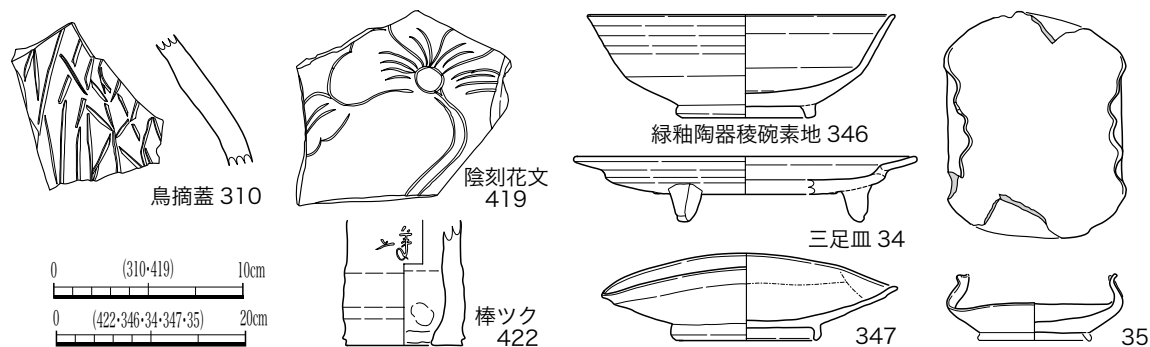


図 4 三ヶ所遺跡の主要出土遺物実測図（愛知県埋蔵文化財センター 2008 より転載）

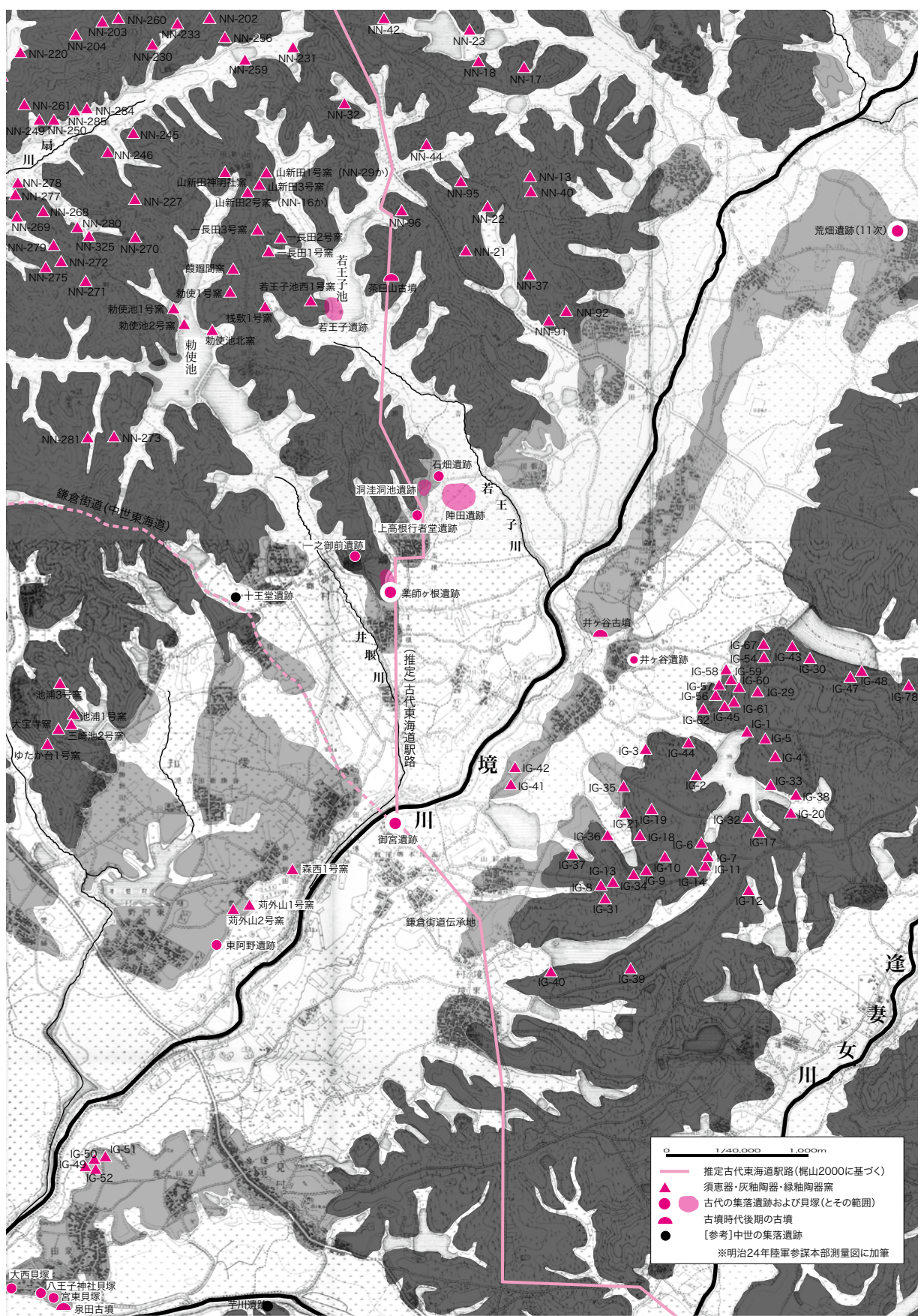


図5 境川中・下流域の窯業遺跡と関連遺跡分布図

した。

さて豊明市内（境川右岸）では、薬師ヶ根遺跡付近などで、丘陵先端部に連なる小規模な段丘があり、豊明市役所付近はやや広い段丘面となっている。後者の縁辺は境川の河道に接しており、しかも対岸の台地との間は狭いことから、渡河点になりやすい環境にある。

そこで想起されるのが東海道の渡河点であるが、推定古代東海道駅路は、両村駅家を発して現在の井堰川に沿った微高地を南下して当該地点に至る（梶山 2000）。後に東海道は、『更級日記』（菅原孝標女著）によれば 11 世紀前葉までに二村山を越えるいわゆる鎌倉街道のルートへ変わったと考えられる。しかしその段階でも、豊明市の「宿」地名付近にある鎌倉時代～戦国時代の遺物が多数出土した十王堂遺跡（豊明市史編集委員会 2001、愛知県埋蔵文化財センター 2015）や、その南東にある青木地蔵・十三塚遺跡を通過して刈谷市内の鎌倉街道伝承地に至り、渡河点はほぼ同じである。

その渡河点には刈谷市・御宮遺跡がある。遺跡の位置は、境川に井堰川が接する実質的な合流点でもある。当該遺跡は発掘調査がなされていないが、1963 年に砂質の堆積層中から灰釉陶器（K-14 号～K-90 号窯期）・須恵器・山茶碗 33 点が採集されている。採集資料であるため内容に偏りがあるかもしれないが、須恵器・灰釉陶器は完形が多く、碗・長頸瓶・手付瓶という器種に集中していることから、あたかも祭祀用の一式を思わせる。また遺跡所在地が酒井神社の北隣ということもあり、祭祀遺跡という評価もなされている（刈谷市史編さん編集委員会 1989）。しかし土器の中にはひび割れなどあきらかに焼成不良品（図 6 の 24・22）も 3 点存在し、流通の直前で選別・廃棄された可能性が高い。したがって御宮遺跡も窯業関連集落と考えられる。ただし東海道駅路と境川の交差点（衢）という祭祀場にふさわしい地点でもあり、土器群に祭祀具が含まれている可能性も高い。

さて、御宮遺跡出土の土器群は、遺跡の位置関係から後背丘陵に展開する猿

投窯井ヶ谷地区（IG）から搬入された可能性がまず考えられる。井ヶ谷地区の操業時期は NN-32 号窯期～K-90 号窯期であり、これに山茶碗を加えても、御宮遺跡土器群の時期と同一である。これに窯跡群から遺跡までの距離（1～2km）を考慮すると、一旦選別を経た製品が集荷され二次的な選別がなされた場として想定できる。

しかしその一方で、先述のような焼成不良品が搬入されている点にも注意しておかねばならない。そこで渡河点付近をみると、半径約 1.2km の範囲内において、荻外山 1・2 号窯や境川左岸に IG-41・42 号窯が、丘陵の窯跡群から外れて段丘縁辺に分布している。例えば境川右岸にある森西 1 号窯では、試掘調査で灰釉陶器窯の窯体断面が確認されており（豊明市教育委員会 1994）、その時期は O-10 号窯期～K-14 号窯期とみられる。分布からみて、これらの窯からも御宮遺跡へ製品を搬入していた可能性は高く、その場合一次的な集荷・選別がなされたと考えられる。すると、御宮遺跡では、高次の集荷・選別とともに近隣の窯からの搬入も受けていたことになる。

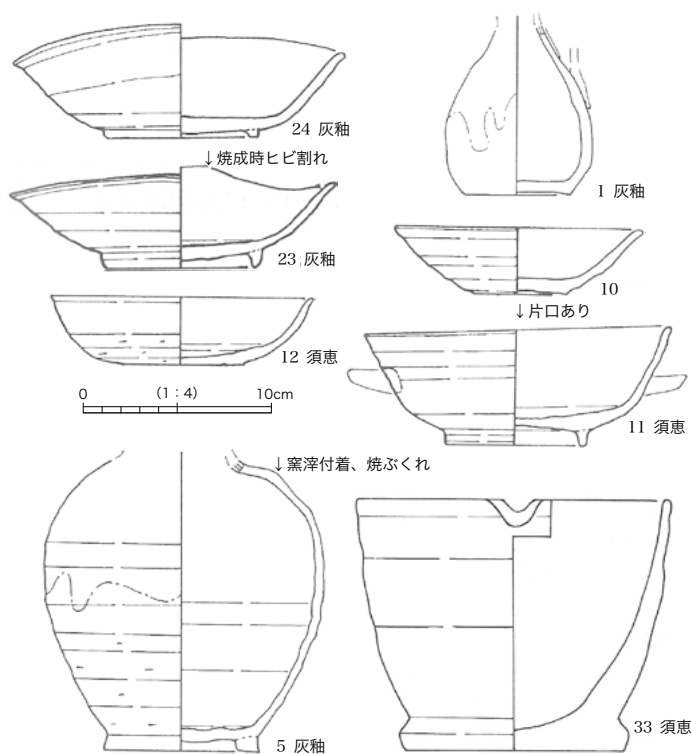


図 6 御宮遺跡主要出土遺物実測図（刈谷市史編纂委員会 1989 より転載）

6. 古代窯業関連集落の消長

前項までは、古代窯業関連集落と窯との関係を見てきたが、ここでは集落の消長からその特徴を探ってみよう。

荒畑遺跡は、みよし市大字三好に所在する古代から近代の集落遺跡である。地形的には境川左岸の段丘面に立地している。遺跡地がそのまま現在の集落になっており、これまで近世の集落遺跡と認識されていたのであるが、平成25年度の発掘調査で古代から中世の遺構・遺物が検出された。

主な遺構は直交関係にある溝2条（SD1・SD2）にとどまるが、そのうちSD2では、ほぼ完形に復元できる須恵器甕を中心に蓋・杯・長頸瓶が集積する箇所がある。埋土に炭化物の多い点も注目され、これらはまとまって廃棄されたようである（みよし市立歴史民俗資料館2014）。甕は丸底であることからNN-32号窯期以前と考えられ、それ以外のものはNN-32号窯期～O-10号窯期であろう。須恵器の器種は偏りがなく、土師器長胴甕1点も含まれていることから、8世紀後半の集落における土器一揃えである可能性が考えられる。

当該遺跡の調査成果は今後の遺物整理が待たれるが、出土遺物には釉着資料や焼成不良品が含まれているので（みよし市立歴史民俗資料館2014）、古代の窯業関連集落である可能性が高い。またその初現は、上述の内容によれば8世紀半ばを大きく遡ることはなさそうである。周辺（猿投窯黒笹地区）における須恵器窯の操業開始時期と同じとみてよいだろう。

このように、境川流域の古代窯業関連集落遺跡（薬師ヶ根遺跡・御宮遺跡・荒畑遺跡）はいずれも8世紀半ば頃に開始される。中には薬師ヶ根遺跡のように8世紀前葉に遡る集落も

あるが、この事例では、東海道駅路と両村駅家の成立に関係していると考えられる。したがってほとんどの窯業関連集落は、同流域における須恵器生産開始に連動して、新たにつくられたものということになる（表1）。

これに対して、境川流域の後期古墳とそれを造営したとみられる集落の遺跡は、刈谷市・井ヶ谷古墳（6世紀前半）と泉田古墳（6世紀後半）などの単独墳が知られ、前者には古墳時代須恵器が出土した井ヶ谷遺跡、後者には7～8世紀の須恵器や製塩土器の出土した宮東1号・2号貝塚が隣接している（刈谷市史編さん編集委員会1989）。しかしこれらの集落遺跡から窯業関連遺物が出土したという報告はなく、現況では窯業関連集落である可能性は低い。

上記以外では古墳として未確定な、みよし市福谷町・市場古墳（6世紀後葉?）や東郷町・茶臼山古墳（7世紀?）もある。茶臼山古墳の近隣には豊明市・若王子遺跡があり、6～7世紀を中心とする掘立柱建物・堅穴建物で構成される集落遺構が検出されている（豊明市史編さん委員会2001）。この時点では周辺に窯はなく、窯業に関わる遺物もないことから、主たる生産は若王子川の谷における農業と推測される。

興味深い点としては、8世紀あるいは灰釉陶器以降の遺物がほとんどないことである。つまり、間近に8世紀後半以降の窯が所在するにも関わらず、それとの関係が希薄なのである。当該集落の終末については確言できないものの、少なくとも多量の土器が廃棄された状態はないことから、その場において窯業関連集落に変貌した可能性は低い。

以上の古墳時代（以前）からの集落遺跡は、古墳の存在も合わせると在来集団であることが確実視されるのであるが、これらは8世紀以降に境川流域で高まる窯業生産の拡大には呼応していないと考えられる。例えば宮東貝塚で

表1 本稿で取り上げた古代窯業関連遺跡の消長

	西暦 区分 窯期	～7世紀 ～T-17	8世紀			9世紀		10世紀		11世紀～ 山茶碗～
			前葉 I-41～C-2	中葉 I-25～NN-32	後葉 O-10	前半 K-14	後半 K-90	前半 O-53	後半 H-72	
境川	薬師ヶ根遺跡									
	御宮遺跡									
	井ヶ谷遺跡	古墳時代須恵器								
	荒畑遺跡									
天白・岩崎川	三ヶ所遺跡									
	西田面遺跡									山茶碗7型式
	金萩遺跡									

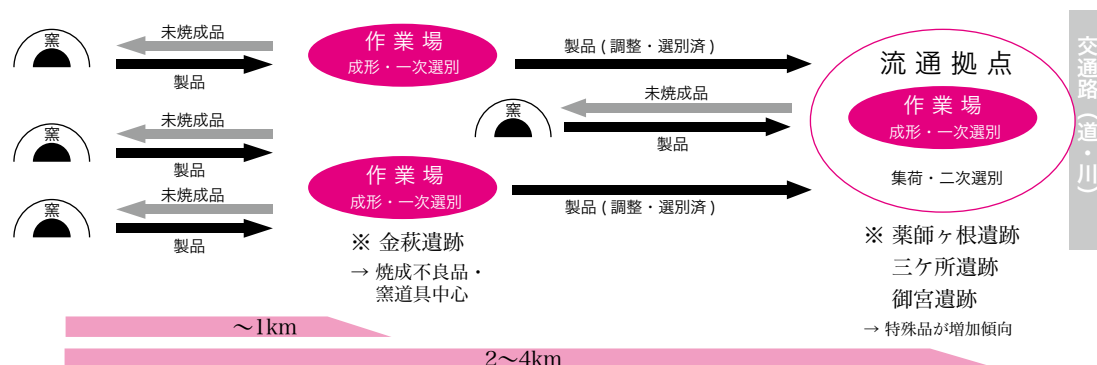


図7 古代窯業関連集落と窯の関係

は、知多式第3類(7世紀)に引き続いて知多式第4類(8~9世紀)の製塩土器や灰釉陶器が出土していることから、奈良時代以降も塩の生産・流通に関わる集落であったとみられ、集落景観を変えるほどの生業の転換はなかったと考えられる。

以上にみる在来集団の集落との関係から、境川流域の古代窯業関連集落は、当該地域に窯業を移植した新たな集団によって集落経営が始められたと考えることができる。

古代窯業関連集落の事例からすると、土器成形と焼成後の選別(一次選別)を行う作業場と、各作業場から集荷された製品をさらに選別(二次選別)し、消費地へ流通させる流通拠点からなる階層構造になっていたことが提示できる。

このうち流通拠点の設置は、従来から機能し

ていた河川交通に加えて、境川流域の場合、東海道駅路の整備が大きく関与していたと考えられる。特に両村駅家とその周辺集落の形成が流通拠点の基盤になったことは、薬師ヶ根遺跡における集落の開始時期が窯業生産の開始に先行していることから可能性が高いといえる。

【謝辞】 本稿作成の過程で各機関・個人のご協力とご教示をいただいた。記して謝意を表したい(五十音順、敬称略)。

愛知県陶磁美術館、刈谷市教育委員会、豊明市教育委員会、名古屋市博物館、日進市教育委員会、みよし市歴史民俗資料館、鶴飼堅証、大西遼、岡村弘子、岸田裕夫、酒井喜久乃、城ヶ谷和広、菅原美智子、野々山禎久、平井義敏。

文献

- 愛知教育大学 1989 『増補版 井ヶ谷古窯址群』
- 愛知県史編集委員会 2012 『愛知県史 資料編 考古4 飛鳥〜平安』 愛知県
- 愛知県埋蔵文化財センター 2003 『金萩遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第119集
- 愛知県埋蔵文化財センター 2008 『三ヶ所遺跡 西田面遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第140集
- 愛知県埋蔵文化財センター 2015 『薬師ヶ根遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第197集
- 池本正明 2011 「金萩遺跡刻書土器小考」『研究紀要』第12号 愛知県埋蔵文化財センター
- 宇野隆夫 1993 「推古朝変革論」『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代土器研究会
- 梶山勝 2000 「古代東海道と両村駅-豊明市出土の平城宮式軒丸瓦の提起する問題」『研究紀要』第23巻 名古屋市博物館
- 刈谷市史編さん編集委員会 1989 『刈谷市史 第5巻 資料(自然・考古)』
- 岸本道昭 2004 「駅家とその周辺-播磨国古代山陽道の駅家と地域社会-」『駅家と在地社会』奈良文化財研究所
- 城ヶ谷和広 2008 「猿投窯における須恵器生産の展開-分布の問題を中心に-」『橘崎彰一先生古稀記念論文集』橘崎彰一先生古稀記念論文集刊行会
- 城ヶ谷和広 2012 「製陶」一瀬和夫他編『古墳時代の考古学5 時代を支えた生産と技術』同成社
- 高橋美久二 2004 「駅家の構造」『駅家と在地社会』奈良文化財研究所
- 豊明市教育委員会 1994 『姥子古窯跡発掘調査報告書 付 森西1号窯跡試掘調査報告』
- 藤澤良祐 2007 「第1章 総論」『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県
- 古尾谷知浩 2012 「古代尾張・参河国の手工業」赤塚次郎編『東海の古代3 尾張・三河の古墳と古代社会』同成社
- みよし市立歴史民俗資料館 2014 『みよし市立歴史民俗資料館春季企画展 発掘されたみよしのムラ』
- 森勇一・宇佐美徹 2003 「第1章 第2節 豊明市の地質」豊明市史編集委員会『豊明市史 資料編補7 自然』